

6月23日「この家をいっぱいにしてくれ！」使徒言行録2：37～47、ルカ14：15～24

今日は結論から言いますが「この家をいっぱいにしてくれ！」私たちはこのように神様から呼びかけられています。この呼びかけを私たちへのものとして聴けるかどうか、今日、私たちが問われていることです。

さて、イエスさまはこんな譬えを話されました。ある人が盛大な宴会を開くことにしました。時間になったので僕が呼びに行くと招かれていた人たちは次々に断りました。ある人は畑のため、ある人は、家畜のため、ある人は結婚したばかりだから・・・仕事や家庭の都合を優先したわけですが、よくあることです。特に結婚したばかりであることは、イスラエルでは兵役を拒否する理由にもなりました（申命記20：7）。とにかく断った人達は車が渋滞してたとか、財布を無くしたとかふざけた理由ではなかったのです。しかし、断られた主人は当然良い気持ちはしませんから怒ってしまいます。そこで僕に命じて別の人たちを招くことにしました。次に主人が招いたのは驚くような人達でした。町の広場や路地でいわば露頭に迷っている、貧しい人、身体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人たちでした。それは当時、社会的な落伍者とされた人達でした！特に目や足の不自由な人は神殿に入ることが禁じられていた宗教的にも周縁に追いやられた人達だったのです。それでも会場が一杯にならないのを見ると、主人は、今度は通りを歩いている人たちを手当たり次第に無理やり連れ来るように僕に命じました。「通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ！」

この譬えは何を表しているのか、というところから始まっています。「**食事を共にしていた客の一人は、これ聞いてイエスに、『神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう』**と言った。」そうです。これは神の国の話なのです。昔から神の国は「宴会」をモチーフに表現されてきました。今もそうですが、共に食事することは親密な関係の証しです。イエス様は特に大切な教えをすべて食事の席で語られました。主人が催した宴会は神の国です。そこへの招待は神の国への招きなのです。ですから、これは何をおいても真っ先に応じなければならない類のものです。けれども、あらかじめ招かれていた人たちは、この招きを断ってしまいました。たとえその理由が正当なものであったとしても、神の国より大切なものはありません。招きを断った人たちの姿は、神の国ではない、この世のむなししいものを追い求める私たちの罪の現実を示しているでしょう。

また、この譬えはイエスさまがなされたことを端的に表しています。イエス様は社会で小さくされている者たちと共に生き（つまり、貧しい人、身体の不自由な人、目の見

えない人、足の不自由な人たち)、癒し、その人たちこそ神の国にふさわしいと教えられました。そして神の恵みは、民族や社会的な階層やすべての壁を越えてすべての人に届けられていることを伝えました。主人は僕に「通りや小道に行く人を無理にでも連れて来るように」と命じます。神の国に招かれる者に民族や社会的身分などの壁は一切ないのです。

さあ、ところでこの譬えで神さまの僕として働いている者とは一体誰のことでしょう？旧約の預言者たち、イエス様、その弟子たち、どれも適切です。けれども、私はこの「僕」とは今を生きるキリストの弟子である私たちのことだと受け止められると思います。ですから、今日、私たちは神さまからこう呼びかけられているのです。「**通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ！**」この家を満たすのは誰でも良いのです！無理にでも連れて来なさいと言われていました。子どもでも、大人でも、健常者も障害者も、男でも女でも LGBT でも、キリスト者でもそうでなくとも、善人でもたとえ悪人であっても、さて、私たちはこの呼びかけに応えられているのでしょうか？

私は神学生の時によく、大学の友人を教会に誘ってバザーとかキャンプの手伝いをしてもらいました。その時にどんな友人を連れて行くと良いかを考えました。授業は真面目に聞いていて、出来れば髪の毛は黒に近い方が良いかな、挨拶がちゃんと出来て、さわやかで教会の婦人たちから気に入られそうな人、そんなことを考えました。教会に連れて行くなら誰でも良いわけではなくて、なんとなく連れていきやすい人と行きにくい人があると感じていました。

以前、神戸の教会に居た時に、時々食べ物を貰いに来る方がいました。ある日、彼は私にお金を貸してくれるように迫りました。断るとこんな風に脅すのです。「日曜日にこの教会に来てやろうか!？」私は色々ショックでした。その人は、礼拝は自分のような者が招かれていない場所だと思っていたのでしょう。

多度津教会に来て最初のイースター礼拝は私にとってターニングポイントでした。目標が明確になった瞬間でした。ダチョウのたまごのオムレツを作ろうと呼びかけた結果、思ったよりも大勢の方が来られました。その中の小さなお子さんを連れての方に「礼拝が辛かった、もう二度と出たくはない」と言われたのです。付属保育園があり、子どもたちのために毎週祈っていた私たちの教会は実は小さな子ども連れの方への配慮が圧倒的に欠けていたのです。

多度津教会の看板にも、たいていの教会の案内にはこうあります。「どなたでもお越しく下さい！歓迎します」実際はどうでしょう？もちろんそう願ってはいますが、現実

問題として私たちの教会には人を入りづらくしている高い敷居があるでしょう。中に居る私たち自身が連れてくる人を選んでいきますよね？「どなたでも」からは程遠く、看板に偽りアリなのです。「通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ！」私たちの教会はまだまだこの呼びかけに応えられてはいないと思うのです。

少し歴史の話をしませんが、私たちの教会は今は日本キリスト教団というプロテスタントの合同教会に属していますが、元々は関西学院を創設したランバスという宣教師によって建てられました。ですから、その宣教師を派遣したメソジストという教派が源流とあって良いと思います。このメソジストは1700年代後半に、イギリス聖公会の司祭だったジョン・ウェスレーによって始められました。メソジスト派は最初から、社会的関心を強く持っていました。というのも、メソジストが始まったのはちょうど産業革命期、社会が激変していた時期だからです。この時期、都市工業の担い手として、大勢の農民たちが大都市へと流入しました。ちょうど、日本の高度経済成長期に、地方の農村の若者たちが東京や大阪などの大都市を目指したことに似ています。そうすると、どんなことが起こるのか？都市に流入した人たちは、簡易的に立てられた集合住宅に住みます。工場主たちには都合よく、劣悪な環境で長時間労働を強いられます。地方から出てきていますから、彼らは、病気やけがををして働けなくなっても助けてくれる親戚などがいません。さらに、彼らは地方の所属教会から離れてしまったために、出席出来る教会もありませんでした。メソジストが寄り添ったのはこの様な人達だったのです。教会がなく、霊的に彷徨う人達のために、路傍で説教をしました。読み書きや計算ができず、不利な契約を結ばれ、給料や労働時間をごまかされても分からない人達のために労働者のための学校や教会学校を始め、読み書き、計算を教えました。血縁による助け合いを失ってしまった人たちのために、身近な地域に住む信徒同士を結ぶ「組会」を組織し、互いにケアをし合い、特に経済的に困窮した場合に助け合えるようにしました。このような働きをするメソジストの教会は「貧しい人、身体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人たち」そして所属する教会を持たない宗教的に失格の烙印を押された人たちがいっぱいになりました。まさに今日のたとえ話のようです。私たちはそのような伝統を受け継ぐ教会なのです。愛光保育園という福祉的な働きもその延長線上にあると私は思っています。

ウェスレーの時代の話をししましたが、今の私たちの社会と比べてどうでしょう？かな

り共通点があるのではないのでしょうか？地方から都市へと若者が流入し、都市部では若い世代が困窮する。地方では高齢化が課題となる。地域の繋がり、血縁など様々な繋がりが失われ、皆が孤独を抱えている。人間は時代をまたいで同じ失敗を繰り返すなどと思わされます。先日、四国成全会があつて、四国にいる関西学院出身のメソジストの伝統の中で育ってきた牧師たちの集まりに行ってきました。特に子ども食堂がトピックで新居浜教会、三津教会、八幡浜教会、いろんなどころで子ども食堂を行っていて（あまり良いことではないですが）大盛況らしいです。そこでは、いろんな人や社会的の課題と出会うそうです。イエス様は神の国は宴会だ、この宴会にあらゆる人を招くようにと言われましたが、子ども食堂はその理念にかなり近い活動のように私は考えています。130周年の記念事業として、記念礼拝やコンサートのような内向きな事業のほかに外向きの活動の準備をすることになっていますが、何とか多度津教会でも実現できないかと願っています。どなたか志を一緒にしてくれないでしょうか？

先日、中道先生が関西学院から来られた際に、食事をしながら「教会は外国からの方々」と地域との懸け橋になる可能性を秘めている」と言う話になりました。今、私たちの地域にも、工場などのために海外から働きに来る方が大勢おられます。私たちの教会にも毎週来られていてとても嬉しく思っています。そこには、嬉しい出会いがあるのと同時に、異なる文化の者同士が同じ地域に住むわけですから、例えばごみの出し方一つでも様々な課題もあります。教会は、海外から来られる方とキリスト教という基盤を持っている分コミュニケーションが図りやすいです。地域と移住者の接点となり、課題に共に取り組める可能性を秘めています。実際、中道先生がおられたドイツでも移民のために教会が大きな働きをなしていたようです。もし、多度津教会がそのような働きを出来ればどれほど素晴らしいだろうと思います。

5月から役員会では葬儀についての話し合いを始めています。高齢化し、死後の様々なことについて不安を抱える方が教会員の方に大勢おられるからです。11月の召天者記念礼拝の際には説明会をしたいと思っています。そこで話にでましたが、葬儀やお墓のことは、教会だけでなく社会全体の課題です。それに悩む人に教会として関わっていければどれほど素晴らしいだろうかと思います。

私たちの教会は創立130周年を迎えます。もうそろそろ教会の役割は終わるのでしょうか・・・全くそんな気配はありません。むしろまだまだ可能性も使命も課題も山積みです。私たちは今日も神様から期待を込めて呼びかけられています。「**通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ！**」この呼びかけに改めて真剣に向き合っていきたいと願うのです。